

群馬県前橋市（国内 62 例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る
疫学調査チームの現地調査概要

令和 5 年 1 月 19 日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 農場の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場は平野部にあり、周囲には小川、畑、民家が存在していた。
- ② 調査時、農場から約 500m 離れた池で、数羽のオオバンや多数のカモ類を確認した。
- ③ 当該農場には 5 棟の 2 階建てウインドウレス鶏舎があり、各棟は内部の壁で 2 区画に区分されるが内扉を使用して行き来しており、鶏舎全体を一体的に管理していた。各区画には背中合わせ直立 9 段（1 階：4 段、2 階：5 段）ケージ 3 列を有する。発生時、9 区画で採卵鶏が飼養されており、発生区画は中央に位置する鶏舎の北側の区画であった。
- ④ 当該農場の衛生管理区域内には堆肥舎、衛生管理区域外には GP センター及び倉庫が併設されていた。

2 通報までの経緯

- ① 飼養管理者によると、発生区画（通報時 132 日齢）の直近 3 日間の平均死亡羽数は 9 羽程度であった。
- ② 1 月 18 日朝の見回り時に発生区画で死亡鶏は認められず、同日 13 時頃に従業員が設備の修繕を目的として立ち入った際に、2 階入口側から 3 列目の奥寄りに位置する下から 2 段目の 1 ケージで 8 羽の鶏がまとまって死亡していることを確認したことから、家畜保健衛生所に通報したとのこと。
- ③ 家畜保健衛生所の到着までの間に発生区画全体を改めて見回りしたところ、更に 45 羽の死亡鶏が確認されたが、いずれも散在していたとのこと。なお、この中には通常の見回りで気づいていなかった古い死体も含まれるとのこと。
- ④ 調査時、発生区画では複数の死亡鶏がまとまっている箇所が散見された。

3 管理者及び従業員等

- ① 当該農場では、25 名の従業員のうち 6 名が鶏舎管理に従事しており、鶏舎の担当分けはなく、1 名当たり 1 日 1 鶏舎を担当していたとのこと。鶏舎担当以外が鶏舎に立ち入ることは基本的にないとのこと。
- ② 鶏舎管理以外の 19 名は、堆肥舎の管理 1 名のほか、衛生管理区域外の GP センター 17 名、事務 1 名が従事しているとのこと。

4 農場の飼養衛生管理

- ① 公道と鶏舎の境界にはフェンスが設置され、鶏舎への通用口は使用時以外施錠されている。フェンスの通用口や GP センターと堆肥舎の入口には立ち入り禁止表示が設置されていた。
- ② GP センター横の駐車場（農場入口）には車両消毒用の動力噴霧器が設置されており、衛生管理区域内に入らない従業員の自家用車、飼料運搬車両等を含め、農場を訪れる車両は全て車両消毒を行っていたとのこと。
- ③ 飼養管理者によると、鶏舎管理担当及び堆肥舎担当の従業員は出勤後、公道を挟んだ衛生管理区域外の更衣室で農場専用の作業着及び長靴を着用し、更衣室を出る際に手指消毒を行った後、農場脇の公道を通過して鶏舎又は堆肥舎に向かうとのこと。各鶏舎及び堆肥舎へ行く際は、農場脇西側の公道を介する必要があるため、公道と衛生管理区域を行き来する際の更衣・消毒は行っていないとのこと。
- ④ 従業員が各鶏舎に入る際には、専用出入口の外側で靴底消毒（逆性石けん、毎日又は

汚れたら都度交換)を実施し、鶏舎専用長靴に履き替え、手指消毒と手袋着用を実施し、鶏舎内部で再び消石灰槽を踏み込んでいるとのこと。

- ⑤ 外来者は、農場入口で車両消毒、手指消毒と立入記録簿への記帳を行うとのこと。廃鶏出荷やひなの導入を行う者は、系列会社が用意した作業着と長靴を予め着用して来場し、鶏舎に入る際には更に長靴の交換、踏込み消毒、手指消毒、手袋の着用を行うとのこと。他の鶏舎に入らない業者も、来場時に長靴の交換、手指消毒を行うとのこと。
- ⑥ 系列会社の獣医師が年4回ほど定期的に来場するが、直近の訪問は12月12日であり、その際は鶏舎には入らなかったとのこと。
- ⑦ 農場は比較的新しく、鶏舎の壁やネットに目立つ破損はなかった。
- ⑧ 農場敷地には消石灰を月に1回以上散布しており、雨で流れた際には追加散布を実施しているとのこと。なお、1月1日に群馬県1例目が発生してからは、農場脇の公道にも消石灰を散布するようにしたとのこと。
- ⑨ 飲水は水道水を貯水タンクに貯水して使用しているとのこと。
- ⑩ 鶏舎横の飼料タンク上部には蓋が設置されており、全ての鶏舎で鶏舎内のラインを通じて自動給餌を実施しているとのこと。
- ⑪ 系列の育雛農場からひなを導入しており、区画ごとにオールイン・オールアウトを行っている。オールアウト後は、鶏舎の洗浄・消毒を実施し、14~21日間の空舎期間を設けているとのこと。直近の導入は発生区画へ12月29、30日。直近の出荷は発生区画の隣接鶏舎から1月7、9、10日。大雛の導入作業は系列会社が行い、廃鶏の出荷作業は業者に委託していたとのこと。
- ⑫ 鶏糞は、各鶏舎で週2~3回除糞ベルトとベルトコンベアで鶏舎から堆肥舎に直接運搬され、堆肥化しているとのこと。鶏糞を搬出する鶏舎奥側の床開口部は、ベルトコンベアの運転時以外は板で塞いでいるとのこと。堆肥舎担当の従業員は堆肥舎入口で長靴を履き替え、手袋の上から軍手を着用し、系列会社の堆肥運搬業者についても堆肥舎に入る際は、長靴の交換、手袋の着用を行うとのこと。
- ⑬ 死亡鶏は朝夕の健康観察時に回収し、鶏糞と一緒にベルトコンベアで直接堆肥舎に送られ、そのまま鶏糞とともに発酵処理しているとのこと。
- ⑭ 集卵用バーコンベアは鶏舎手前からGPセンター2階の洗浄場につながっており、上部はトタンで覆われ、鶏舎側開口部はベルト運転時以外はシャッターで閉鎖しているとのこと。
- ⑮ 調査時期は、鶏舎奥の換気扇から排気し、モニター屋根と鶏舎の側面のスリット窓から吸気する強制換気を実施しているとのこと。夏季はクーリングパッドから吸気するトンネル換気を実施しているとのこと。
- ⑯ 他農場と重機や器材等の共用は行っていないとのこと。

5 野鳥・野生動物対策

- ① 飼養管理者によると鶏舎内でネズミ等は見かけないとのことだが、殺鼠剤を設置して対策しているとのこと。
- ② 農場内ではカラスやスズメを見かけるとのこと。調査時、農場内にカラスやスズメを確認し、鶏舎外周付近には、ネコと思われる動物の糞や小型野鳥の糞を多数確認した。
- ③ 堆肥舎内では、スズメの姿を確認したほか、飼養管理者によるとネズミも見かけるとのこと。

(以上)